

Title	読みとりの授業過程について
Author(s)	三上, 勝夫; 安増, 京子
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. C, 教育科学編, 33(1): 1-10
Issue Date	1982-09
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4888">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4888</a>
Rights	

## 読みとりの授業過程について

三上勝夫・安増京子

石本由紀子先生の授業を見せてもらった。桂元三先生に引率された百名近くの学生は、この授業に圧倒されてしまった。斉藤喜博のそれに代表される「活動の組織」の教授学の観点からは申し分のない授業だったろうと思われる。子どもたちの感応の力もすばらしく育てられている。これらの点については、授業後の渡辺守夫先生のお話し、学生の感想、道新の記事などが的確な指摘をしてくれている。他方、「認識の形成」の教授学の立場から見ても、相当に興味ある問題が含まれている。ここでは、石本先生の授業を素材にさせてもらい、読み方教育における認識の問題について議論してみる。この学級は六年生（札幌市立北都小学校）、教材は『二銭銅貨』（黒島伝治）だった。

### 授業の過程

健吉が稲を蒔っていると、角力を見に行っていた子供達は、大勢群がって帰って来た。彼等は、帰る道々独楽を廻していた。

- …略…楽しそうに帰ってきたんでしょ。健吉ももう大きいけれど行きかかったんでしょ。…略…
- 健吉はやっぱり大きくても一年に一回くらいしか来ないすもうだから、いきかかったんでしょ。…略…
- それを見ていた藤二はね、大勢で帰ってきたんだから(指摘されて)あ、健吉は、むらがるってことは集まるってことなんだから、みんなで集まってわあわあいいながら帰ってきたんだと思うんだ。それで藤二はそれを見て(指摘されて中断)……。
- …略…一年に一回しかないから、口には出さないけれど、やっぱり心の中ではそういうのを見ているうちに、見に行きたいという気持は少しあったんだねえ。
- …略…自分はこんなに一生懸命働いているのに、この子供達はみんな楽しそうに遊んでいるんだから、だからここでは、うらやましそうに健吉は見ていた。
- …略…貧乏のために見に行けなかった。
- …略…だけど自分も行きたいけど、藤二のことを思うと、藤二のことがなおさらかわいそうというか、そういうふうにしてたと思うんだよね。自分がそうで、大人になって仕事で行けないんだけど、藤二は六つなんですよ。六つなのに仕事で、いっしょに仲よくできないっていうことで…略…

この部分については、「藤二のことを思うと」の的確な発言があって、やや修復されたとはいえ、健吉は「行きたかった」し、「うらやまし」かったとする「読み」が認められたかたちとなっていて、うなずけない。行きたがっていたのは藤二であり、仕事もいつになくいやだった。むらがり帰ってくる子供達を見て、健吉が弟の藤二のことをふと思ったとするならば、すもうに行った子供達と、行けなかった藤二とはパラディグマチックな関係にあるわけだから、妥当で、必要な想像にもとづく読みであるといっている。

健吉が「大人」であるという発言もたしかにあったが、健吉の年齢が二〇歳前後であるということをも推定させる記述は読みとれていただけだろうか。読み手の子どもたちには、六歳の藤二よりやや年上の兄の像があるかもしれない。

ここでの「読み」は、読み手の感情が先にあって、それを登場人物の感情におきかえる作業が行なわれたと見るのが適当だろう。そう見ると、健吉を藤二と読み違えた子どもの気持がよくわかる。このくんだり、読み手が、道々こまさえ廻しながら帰ってくる子供達と対比して、藤二をあわれむ思い、家族にも同情することはもちろん自由だ。

それから暫く親子は稲を苜りつづけた。そして、太陽が西の山に落ちかけてから、三人は各々徒荷を持って帰った。

「牛屋は、ボッコひっそりしとるじゃないや。」

「うむ。」

「藤二は、どこぞへ遊びに行たんかいな。」

母は荷を置くと牛部屋をのぞきに行った。と、不意に吃驚して、

「健よ、はい来い！」と声を顫わせて云った。

…略…

- 行く前には藤二はね、…略…緒を思い切り引っぱっていたんでしょう。八当たりするように声出しながらぶつけるように。それなのに帰ってきたら、シーンとしていて何にも声もきこえないでね。なおさらびっくりっていうか、不思議に思ったんじゃない。
- …略…このとき（田に行く前）は、多分牛は臼をひいていたんでしょう。その石うすって音がするはずでしょう。ガラガラって。その音さえもなんないで、その音さえ聞えないでシーンとしていたんだから、この時は、不安、心配しているんじゃない。
- …略…遊びに行ったんかいなって書いてあるけれど、やっぱりそれだけじゃなくて、心の中ではどうしたのかな、藤二はいないのかなって、そういうふうに思いながら、帰ってきたんじゃないかな。
- あの、前にも母がね、藤二に「そんなに引っぱったら後ろへころぶぞ」って言ったしょ。その時に、なんか心配っていうかそういう気持があったんでしょう。そしてここでもシーンと牛屋が静まりかえっているんだからね、やっぱりそういうところでもどうしたんだってね、そういう心配がすごくあったんでない。
- 「すると、母は牛屋をのぞきに行った」って書いてあるしょ。不安があるけれど、やっぱり「遊びに行ったんかいな」って書いてあるしょ。どこ行ったんだべってね。だから、ちょっとこのぞくような具合だったんだと思うんだけど、…略…どこ行ったんだべなと思っていたら、やっぱり倒れてたからウワーって腰ぬかすっていうか、「健よ、はい来い！」って言ったんじゃない。

…略…

ここでも読み手の主観が、登場人物におしあてられたままになっている。たしかに作品のしかけによって、読み手には、ある不安が醸成されている。

「彼は牛の番をしながら、中央の柱に緒をかけ、その両端を握って、緒よ延びよとばかりに引っばった。牛は彼の背後をくるくる廻った。」

これが、この場面の直前の文である。「うしろへころぶぞ!」という警告にもかかわらず藤二はそうしている。この文は、藤二の身におこる不幸を暗示している。だから読み手が不安を覚えるのは当然なのだ。しかし作品中の人物が、同じく感じているかどうかは別だ。

そもそも、この前の場面での「牛の番」を藤二にさせるということの意味がきちんと読みとられていたかどうか疑問となる。この作品での「牛の番」とは、牛が怠けたなら、鼻輪でもとるか、尻でもたたくかして、ぐるぐる廻りをつづけさせることである。それが藤二のこの日の仕事だ。すもうを見にやらせてもらえないわけだ。牛屋がひっそりしているのは、牛が臼をひいていないということなのだ。母親には藤二が「番」をしっかりせずに遊びにいったのかとうつる。

子どもらしい駄々をこねることもあったとはいえ、藤二は、いいつけをよくきく子だったろう。粉ひき牛の番もまかせられる。そんな藤二なのだから、「遊びに行たんかいな」ということばとはうらはらに、そこはかとな不安が母親になかったとはいいい切れない。しかしそこまでだ。それ以上の想像は許容範囲をこえる。

「のぞきに行く」と表現される行為も軽い。ちょっと見に行くという程度のことだ。もちろんそこにたいへんな事態が待ちうけているとも知らずに。

この場面（第三節）は、とくにきわだって明瞭に、健吉の視点からできごとが物語られている。驚く母の声を聞いた健吉には、まだ何が起きているのかわからない。健吉の目をとおして事態を目撃することになる読み手にも、当然のことながらわからない。読み手は文脈からの推測が可能だという点では、作中人物より優位にいるが、「倒れてたからウワーって腰をぬかすっていうか、『健よ、はい来い!』って言ったんじゃない。」という子どもの読みは、この後の文に書かれていることを使ってしまったわけだ。

健吉は、稲束を投げ棄てて急いで行って見ると、番をしていた藤二は、独楽の緒を片手に握ったまま、暗い牛屋の中に倒れている。頸がねじれて、頭が血に染っている。

…略…

— そして、健吉も見たら、この、藤二が倒れているんでしょ。それも片手に緒をぎっちりぎったまま。それはね、今でもまだ生きているっていうようにね。手だけは、そういうふうにぎっちりぎっていったんでない。

T こまの緒をぎっちりぎっていったって言ったんでしょう。こまの緒をぎっちりぎってたっていうのは？

— …略…緒をやっと買ってもらえてもみんなのより短くて、そういう気持で何回も何回も一生懸命、こう、柱に緒をかけて引っばっていて、それでも伸びないうちに、そうやって死んでも

にぎったままっていうんだから、それだけ緒のことを。

- …略…この藤二には、死んでまでも握っているんだから、こまの緒が大事っていうか、短くても無理してでもお母さんが買ってくれたんでしょ。だからそれだけ緒を大事にしてるっていうか、緒は自分のもので離したくないように、そういう気持で緒をぎっちりにぎっていた。
- …略…私はちょっと違うと思うんだけど、それほど緒が短いのが気になっていた。すもうも見に行けないし、緒も短い、何もかも違うんでしょ。だからそれだけ緒が短かったということが気になって、死んでまでこうにぎっているほど…略…
- …略…多分、にぎっていたのは、みんなの仲間に入りたいたいっていう気持が深くあって…略…
- 自分だけが貧乏で、貧乏なためにこうやって何もかもみんなとっしょになれないっていう、そういうくやしい気持が死んでもやっぱり残っていて…略…
- …略…そういう強い気持があって片手は離れてしまったけれど、片手はもう絶対離れないっていう位に、そういう風になぎっていたんでしょ。…略…

…略…

T ここんとこいいかな？ 頸がねじれている。頭が血に染まっている。

…略…

- …略…そういうふうになかまに入れたい。自分の思っていたことをできないままに、そのまま死んでいったんでしょ。だから何かここで強めているっていうか、何々しているっていうことで、みじめっていうかそういう感じを強めるために…略…
  - 私は、藤二の気持を強めているというよりは、母の後悔、あとででてくるんだけど、母の後悔の気持を強めているんじゃないかと思うんだけど。何々しているっていうのは、今、目の前でおこっているようなかんじでしょう。だから何ていうか、そういう風に…略…その藤二の倒れていたようすだけは刻みこまれているっていうか、そういう感じだと思う。
  - 場面が頭にうかぶ。
- …略…

子どもたちと教師のやりとりのなかで、「片手に握ったまま」という本文は、「片手に」の印象がやややすくなり、「ぎっちり」が加わって、「ぎっちり握っている」という表現にすり変ってしまった。そのこともあってか「読み」はテキストから離れて、主観的なものにのめりこんでゆく。

かけつけた健吉の目（同時に読み手の目）にうつるのは、倒れている藤二の姿である。その藤二の片手には緒がにぎられていた。

「独楽の緒を片手に握ったまま」の文、あるいはその文の描く形象から読みとれるものはいまでもない。緒を延ばそうとして引っぱっていた藤二の片手から緒がはずれ、そのはずみでのけぞって倒れたところを牛に踏み殺されたということである。「緒が大事」「短い」のを気に病んで、「みんなの仲間に入りたい」「くやしい気持」などの多様な「読み」が、この文ないし、形象がさしだす意味の解釈にあてられているが、いずれも誤読である。

文なりひとまとまりの文なりが形象を描き出し、描きだされた形象がさらに何らかの意味をさし出すという文学作品の表現の構造を、この子どもたちは経験的に知っているのであろう。子どもたちの「読み」は、もっぱら形象の意味を詮索することにあてられている。だが、形象の意味の理解は、そもそも形象が正確に読みとられていることを前提にしなければ、成り立たない。さらにいま一つ重要なことは、形象の意味は文脈のなかでしか特定できないということだ。文脈をはなれては、片手に緒をにぎりつづける形象は、緒への執着とも読める。しかしこの作品の文脈においてはそう

ならない。柱にかけた緒を強く引くあまりに、倒れて、踏み殺されたのだということが語られている。まずはこう読むことだ。

この場面で用いられている「歴史的現在」とでもいうべき表現手段にかかわっての「読み」は成功しているか。記録では略してあるが「こんな後からになっても、今起きたことのようにそれが胸に浮かぶことなんだね」という教師のまとめが結論のようにになっているが、そうだろうか。語りの「いま」に、事件の「いま」が重なってくるのか、事件の「いま」が語りの「いま」を引きよせるのか。子どもたちは前者をとった。が、歴史的現在の本質は後者ではないかと思われる。

さらにいえば、作品に用いられている表現手段のあれこれについて、それらすべてを読みの対象としなければならないということはないだろう。この場合の歴史的現在も、とりあつかうべきかどうかの判断は微妙なところだ。この場面に限っても、たとえば「健吉は」の「は」の使用のし方は異例である。主文に「藤二は」という主語があるのだから、従属文の主語は「健吉が」の方がすわりがいい。では、そのような異例の「健吉は」の表現力は？ また、「番をしていた藤二は」といういい方も気にかかる。たんに「藤二は」でもいいではないか。いや、やはり「番をしていた」ことにもこだわりたい。これらはいずれも味わいある表現ではあるけれども、私たちの文芸学が、その味わいをときほぐせない以上は、読みの対象にすえることはあきらめるほかはないのである。

赤牛は、じいっと鞍を背負って子供を見守るように立っていた。竹骨の窓から夕日が、牛の眼球に映っていた。繩が一つ二つ牛の傍でブンブン羽をならしてとんでいた。……

…略…

— 私は、この、赤牛って書いてあるから、ただ牛がじいっと鞍を背負って子供を見守るようにして立っていたってだけじゃないでしょう。赤牛はって書いてあるでしょう。…略…頭が血にそまっているのは藤二なんでしょう。…略…血っていうのは赤ってということなんでしょう。赤ってっていうのは、赤牛っていうのはここでは悲しみっていうか、そういうことを表わしているんじゃない。

— それに、ここで暗い牛屋や、血に染っていると、赤牛とか、夕日でもうす暗いでしょう。ここではその悲しみや、何か赤いってことで、死の感じ、死のようすが…略…

— …略…竹骨の窓から牛の目玉に映っていたって書いてあるでしょう。さしこんでいたとは書いてないでしょ。…略…だからやっぱり藤二は、後からのことだけれども牛に踏まれて死んだんでしょう。だからやっぱり牛もね、人を踏んだっていうのかな、それをしちゃったので、赤い夕日がさしこんでいたかも知れないけれど、でもこうやって牛の目玉に映っているような感じで…略…やはりそういうようなことをここで感じていると思います。

— ここでは夕日というよりも、この牛の目玉にはね、藤二を映しているっていうかね、赤ってっていうのは悲しみとかでしょ。やっぱりその藤二が……

…略…

T 藤二が映ってるの？ この牛に。何て書いてある。

— いや、夕日。それで牛の目玉が真赤というわけでなく、黒っぽい色になってね。それで、この牛が泣いているっていったら変かも知れないけど、そういうふうに見えたと思います。

— 悲しみを表わしている。

…略…

— それからハエが一つ二つ牛のそばでブンブン羽をならしてとんでいたと書いてあるでしょ。

きこえるくらいなんでしょう。羽がブンブンきこえるくらいなんだから、ここらあたりがシーンと静まりかえって…略…

- …略…はねの音がきこえるくらいなんだからね。こう、音でさえ聞えるんだから、健吉は声もでなくてね…略…こう、母も健吉もびっくりしてね。ただ立ってるだけだ…略…  
…略…

あまりの事態に、息をのんでたちすくむ健吉。時間の流れが瞬時とまり、意識の一部が妙に覚醒している。罪ない殺害者の牛、その目にうつる夕日、ハエの羽音、意識に映ずるこれらのものの列挙が語るのは、すべてを覚りながら、すべなく立ちつくさざるをえない異常事態の体験者のすがたである。しばしば書き手の力量欠如の暴露でしかない「……」の読みこみは避けておく方が賢明なのだが、この場面にかぎっては、なすすべのなさの表現として取りあつかうこともありえる。

子どもの「羽がブンブンきこえるくらいなんだから、ここらあたりがシーンと静まりかえって」「ただ立ってるだけ」などの読みは、この形象のさしだす意味にやや接近してよい。

しかし、赤牛の「赤」に「悲しみや」や「死」を、牛の目に映る夕日に、これまた「悲しみ」を「読む」ということには賛成できない。作品の文や形象から、読み手がどのような印象を受けとるかは、ある意味で自由なのだから、その印象を語りあうことは大いにあってよいし大事なことだ。「私はこう感じた」と。ただし、そのことが根拠にもとづく客観的な読みの作業といつも幸福に一致しているとはかぎらない、むしろ別のことだ、と、自覚されたうえでなされる必要がある。読みにおいて、印象や主観が先行することは少しも否定されない。だが、そこにとどまっていたは読みにはならないのだと強調しておこう。

ことばじりを捕えるようだが、子どものひとりが「やっぱり藤二は、後からのことだけれども牛に踏まれて死んだんでしょ」と発言している。正確には、後から（すなわち後の母親の会話の文から）、死んだ事情がはっきりするのだとでもいうべきなのだろうか。それでも気になるのは、この後の三年後にもつづく母親の述懐を待つまでもなく、この場面にこそ藤二の死とその事情がはっきりと書かれているのだということが、読み手に理解されているかどうかということである。なすすべもなく立ちつくすこの瞬時の描写こそ、藤二の死をはっきりと語るものなのである。作品の読みは、そこまでの文脈において読めるものは読む、読めないものは読まない、というのが原則だ。

「畜生！」父は稲束を荷って帰った六尺棒を持ってきて、三時間ばかり、牛をブンなぐりつづけた。牛にすべての罪があるように。

「畜生！ おどれはろくなことをしくさらん！」

牛は恐れて口から泡を吹きながら小屋の中を逃げまわった。  
鞍は毀れ、六尺は折れてしまった。

- 父はこの時、「畜生」って言ったんでしょ。このときはもうこの「畜生」ってことばしかね、出せないくらい悲しいってうか、くやしいってうか、くやしい、そのくやしい気持をこのことばにね、ぶっつけるように「畜生」っていったんじゃない。

…略…

- …略…自分の子供を殺したのはおまえなんだってね。……自分の力を出しきってブンなぐっ

ているでしょう。だからすごいくやしかったことがわかるんじゃない。

— …略…牛に罪があるように、すべての罪だから力いっぱい自分でも力が出し切れないほど、もう思いきりたたいて、たたいて、たたきまくって…略…

T 牛にすべての罪があるようになってあるでしょう。牛にすべての罪があるの？

…略…

— だから牛にはただ少し踏んだだけなんだけれど、このもってというのは父が長い緒を買ってやれなかったから、こんなふうに貧乏だからってことが、買ってあげられないってことが、牛には罪はないんだけど、自分にはぶっつけるものがないから全部牛に、力の限り全部ぶっつけた。

…略…

— それはね、やっぱり貧乏だからなんでしょ。だからやっぱりなんていうか、その母さんがね、あの藤二にさ、二銭を、たった二銭安くしただけで、貧乏だから、そういうふうに行ったんでしょ。…略…

T ここで直接藤二を殺したのは牛なんだけれども、もとをずっとたどっていくと本当は牛にすべての罪があるんじゃないんだ。じゃあどこに罪があるんだっていうことを、これからみんなはさぐっていくんでしょ。そこんところは、今度、三年たったあとの母の嘆きのことばがあるでしょ。そこんところでもう一回じっくり話しあってみよう。…略…次もうちょっと進んで。

— ここでは、母とか兄はとめようとししないで、ただ見ていたと思うんだ。だからそれだけ父と同じくらいの気持があって…略…

…略…

牛を殴打しつづける父親の怒りを、子どもたちは「悲しい」「くやしい」「にくい」と読みとった。これは、妥当な読みである。父親がはきだす「畜生！」ということば、「ブンなぐりつづける」行為、それらは尋常ではない怒りの、そしておそらく「くやしき」や「悲しき」のいりまじった感情の表現である。

母親は、息をふきかえすことのない息子をかきいだいて母屋へ行ったらう。ぬれ手ぬぐいに藤二の顔の血の汚れをふきながら泣きくずれ、何時間ものあいだ、そのままであったにちがいない。父親は牛を殴りつづける。父は怒りにくるい、母は悲しみに打ちひしがれる。それはまた、わが子への父親なりの、母親なりの愛のせつない証しにほかならないのだが。

健吉は、いまは牛屋にいて父親を見ている。鞍がこわれ、六尺棒が折れて父親がなぐるのをやめるまで、「母とか兄はとめようとししないでただ見ていたと思うんだ」という子どもの発言は、おそらく半分は正解だ。この作品にとって目撃者健吉の存在はきわめて重要である。

「牛にすべての罪があるように。」

このような、倫理性にまさった、評価的な文体の挿入は、えてして作品をぶちこわすものになりかねない。この場合は、からくも失敗をまぬがれたというばかりか、むしろ積極的な効果をにないえている。そうなりえたのは、目撃者健吉の存在である。健吉の目から見て、その「ように」見えたのである。この表現は、目撃者の目をかりて、父親の行為の必然性を説明しながら、それを客観化するという高度の技法的な支えのうえに立っている。「牛には罪はないんだけど、ぶっつけるものがないから全部牛にぶっつけた」という趣旨の子どもの発言は、よい意見である。



牛に「ぶつける」ほかない父親。父の気持はわかるが、打つてもしかたがないと見ている健吉  
……………

### 授業の検討

まずしい作業ながら、これまで「読みとその根拠」「言語と形象による表現の二重性」「読みの過程の原則<sup>(註)</sup>」などを議論してきているので、ここでは、やや異った角度からの問題を二つほど考えてみることにする。この授業記録は、それには都合がいい。

**人物の気持** たいていの国語の教室では、作品に登場する人物の気持を読みとることが、たいへんに重要視されている。読み方の各時間の指導案を見ると、その時間にとりあつかう段落の範囲で、「そのときの登場人物の気持（あるいは心情）を読みとる」という型の目標がたてられることが圧倒的に多い。これについてはある意味で納得できないわけではない。

自分の他に存在するものに思いいたるという意味での想像力に欠陥のある社会のなかで子どもが育っている。すぐれた文学作品とであうことで、他人の心のなかにわけ入る体験をもつことができるとすれば、子どもにとってそれは貴重なことであるにちがいない。子どもの心の成長にとってプラスでないはずはない。作品中の人物の気持を理解することも想像力的な体験といっていだろう。たとえ実生活におけるそれではないとはいえだ。実生活とはことなつて、むしろ自分以外の人物の内面がよく分かるように仕組まれているという点で、ありがたいことだともいえる。つくりばなしだと分っていても、「思いしらされ」たり、「身につまされ」たりの知的、感情的な体験を読み手は味わうことができる。

しかし、そうではあつても、そそっかしく分つたつもりになることは好ましいことではないだろう。これまでに用いてきた用語でいえば、人物の気持は、形象の意味として表現されることが多い。想像力の要求される所以である。

一般的にいつて、形象の意味を読みとる想像は、二つの方向からの限定を受ける。一つは、トートロジーにすぎないのだが、形象の意味は形象がになうというところからくる。首をたてにふるといふ形象は、肯定（同意、受諾……）するという意味をになう。ブルガリア人でもなければ、これを否定の意味には受けとるまい。二つめには、文脈において形象の意味は特定されるということである。ある形象が「多義的」である場合、それを特定するのは文脈である。前者の系として、形象の読みとりが的確でなければ、形象の意味の妥当な読みは成り立たないということがいえる。後者からも、文脈（それまでの形象）との重ねあわせがきちんとなされなければ、形象の意味は妥当なかたちでは特定できないといえる。

この観点からみると、「独楽の緒を片手に握ったまま」の形象の意味の読みは、検討に値する。第一に、「片手に握ったまま」の形象を、微妙なちがいはあるが「片手にぎっちり握ったまま」と読んだことである。発言のつづくなかで、形象の力点は「ぎっちり」におかれるようになり、結局、藤二の独楽の緒への執着としてその意味が解読されることになった。第二は、文脈との重ねあわせである。それが意識的になされなかったことも、まずかった。たしかに文脈をはなれば、「片手に握ったまま」という形象は、緒への執着と読む方が自然だとさえいえる。むしろこの読みが先にあつて、「ぎっちり」がおのずから加えられたのかもしれない。子どもの読みには、それなりに根拠があるのだから、ここから本来の授業にはいつて、この読みは「多義的」な形象の一解釈であつたが、文脈のうえからはより妥当な読みが採られるべきだということを発見させることはできただろう。

この場合の形象の意味は、緒を柱にまわして引っばっていた片方の手がはずれて、のけぞって倒れたところを牛に踏み殺されたということであろう。藤二の気持というのは別のことだ。このように、人物の気持は形象の意味として表現されることが多いけれども、形象の意味がいつも人物の気持であるとはかぎらない。ところで気になるのは、子どもたちの読みが、正確には読み誤りが、二つの制限をこえた想像によるものだったというだけでは説明しきれないように思えることである。この教室でさえ、読みといえば結局のところ人物の気持を読むことだという定型ないしは呪縛から逃れきってはいないのではなかろうかと疑われる。個々の形象を、人物の気持の表現として性急に解釈しようとする志向が、この分節についてだけではなく、随所にみられる。

さきに述べたように人物の気持を読むということはだいたいなことである。しかしそれは作品の豊かな読みの一部にすぎないというべきだろう。また作品中の人物の気持をおしはかることが、貴重な想像力的な体験であるはずであるならなおさら、根拠にもとづく客観的なものであることが望まれるのである。まして、毎時間の読みの授業の主要な課題が、いつも人物の気持を読みとることであるはずがない。

**発言の組織** このことにかんして、結論めいたことをさきにいうと、この授業は、その各分節とも、そこから本来の授業となるべきところを、途中でとどまってしまうというところであろう。これまでに見たように、子どもの発言はどれもが一定の根拠をもっており、的確に組織されれば、妥当な読みに達する可能性を充分にもっている。一例として、授業の最初の一こまを取りあげよう。

ここでは、健吉も角力を見に行きたかったとする読み(a)、健吉を藤二と読みちがえた読み(b)、およびかなりの確かな、健吉が藤二の気持を思いやったという読み(c)が出されている。この(a)と(b)について検討してみる。

読み(a)は明らかにそれまでの読みの不十分さによるものといえる。この作品の二節目の冒頭には、「子供達は皆んな連れだって見に行った。藤二もいきたがった。」という文がある。しかも健吉は働き盛りの青年として描かれている。このことがしっかり読みとられているなら、「うらやましように健吉は見ていた」という読みは、おそらく生まれてこない。この場合、適当なところで、「大きいけど行きたかった」という趣旨の発言が、健吉像としては矛盾していないかどうかを、作品の前部分へ読みもどることなどの指示もふくめて、問いかけてやることは有効だったかもしれない。

しかし、この子どもたちの読みは、角力を見に行っていた子供達が帰ってくるのを見ているのは健吉だということをもふまえている点では正しい。この作品の視点は健吉の目によりそっている。だから、読み(b)があらわれると、読み(a)の子どもたちは、これを論外のこととしてつぶしてしまった。「それを見ていた藤二はね」という発言はたしかにおかしい。それはそうなのだが、よく考えると、読み(a)も読み(b)も似たようなものに思えてくる。読み(a)は、行きたがっていた藤二の心理を健吉の気持だとしてしまったのだし、読み(b)も健吉と藤二の混同という点では同じである。

健吉と藤二の混同という形ではあれ、この子どもたちのように、読み手は、健吉と角力帰りの子供達とが描かれているこの場面で、どうして藤二のことを思うのだろうか。それは、まず、視点のよりそっている健吉の目をとおして、読み手も角力帰りの子供達をながめることになること。つぎに、その角力に行ってきた子供達とただ一人行けなかった藤二は一對の関係になっていること。この二点による。健吉には、行った子供達と二重写しに、行けない藤二が見える、と読み手には見える。もどかしい程の発言をとおして、子どもたちが全体としていおうとしているのはこういうことだ。

だから、この子どもたちの発言を組織するのに、これらの読み(a)、(b)をただちに誤りとし

てはならないのだと思う。読み（a）は、健吉の視点ないしは立場からことがらを見ようとしている。健吉の見たものをおして健吉がどう思っているかを推しはかろうというのは、そのかぎりにおいて正しい。読み（b）は角力帰りの子供達との対比として、また文脈の流れとして藤二のことを思わないわけには行かないということだとすれば、これもそのかぎりにおいて正しい。読み（a）と読み（b）は補いあって妥当な読みに至るのだといえる。

授業がせっかくの発言を充分組織せずに進んでいくなら、発言のよさを生かしきれないということではすまずに、子どもたちの不十分な、主観的な読みを追認してしまうことになるだろう。どの子どもの読みもそれなりに根拠があるのだから、子どもたちが自分の読みの的確な面と不十分な面とを発見し、喜べるような組織のしかたは可能だし、しなければならないことだ。

的確な読み（c）を偶然のこととしないためには、うえに述べたような配慮による発言の組織はぜひ必要だった。

（注）

三上勝夫 「文学作品の読みにかんするいくつかの問題」(一)(二)(三)（北海道民間教育研究団体連絡協議会編）『民教』62号（1981, 7） 65号（1982, 3） 66号（1982, 7）

【付記】 小論は56年度の教育課程論の講義に、教育実地指導講師としてお願いした桂元三先生に、指導の一環として、学生ともども引率してもらい、札幌市立北都小学校六年の石本由紀子先生の授業を参観させてもらった際の授業記録にもとづいて作成した。

（三上：本学助教授 札幌分校）

（安増：本学非常勤講師 札幌分校）